Tsukuba Psychological Research
1989, 11, 1 - 9

知覚諸学説批判の方法論上の問題
——オルポートの知覚諸学説批判とその構造学説（13）——

筑波大学心理学系　金子　隆芳

A methodological orientation for theory appraisals in studies of perception

Takayoshi Kaneko (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba* 305, *Japan*)

F. H. Allport's *Theories of Perception and the Concept of Structure* (1955) begins with a methodological comment on theory construction and appraisal in the psychology of perception. Allport suggested six criteria for the evaluation of scientific theories, i. e., agreement with the facts, generality, parsimony, immediate experimental availability, logical consistency and explanatory value. Explanation is a description of phenomena in more general terms. Before inquiring into Koffka's question "Why do things appear as they do?", perceptual theories must inquire "How do they appear?" Allport classified the perceptual phenomena into six categorires: sensory qualities and the dimensions; figural or configurational aspects; form quality and transposability; perceptual constancy; dimensional frame of reference; concrete object character; and the effect of prevailing set or state. Any complete theory of perception should be expected to incorporate all these aspects of perception.
Key words : methodology, theories, perception

知覚の本質は何か．それはわれわれの周囲にある対象と状況の意識であることに間違いはない．知覚とはそれらが感覚に与える印象に依存し，視覚においてはそれがどのように見えるか，聴覚ならばそれがどのように聞こえるかの問題である．

コフカは視知覚の問題を，「なぜ事物はそれが見えるように見えるか」Why do things look as they do? の問題であると言った．

知覚は，そのような対象と状況の意味と理解と認識をふくむ．さらに知覚とは個々の対象とともに，複雑な環境状況の意識でもある．それはもはや知覚というよりは認知であるが，もともと知覚と認知の区別ははっきりしているわけではない．

「なぜ事物はそれが見えるように見えるか」とともに，「事物はそれ以外に，どのように見えることがあるか」How else could things look being what they are? と素朴に問うこともできる．実際，事物はそれがそうであるもの以外に見えることがある．それにはどのようなケースがあるのか，その条件とその理由を探るときに，知覚の意味と問題が一層明らかになる．

心理学における「理論」の現状

若干のカリカチュアを交えて，これはもちろん比喩であるが，火星からの来訪者が，わが地球上の心理学の華やかな活動ぶりを見ることとしよう．

彼らの見る地球心理学の研究はきわめて多岐にわたっている．実験機器はますます高度になり，実験室からはぞくぞくと新しい事実が報告される．論文誌は目白押し，人間活動のあらゆる面に心理学の応用されざるはない．かくして火星人の宇宙的基準は人間のそれとは違うにしても，かならずや地球心理学に対する彼らの評価は好意的であるに違いない．実験的事実は新たな概念を導き，新たな概念はさらに研究を刺激する．前にも地球を訪れたことのあるゲストは，地球の科学の発展において，理論と実験がともに歩んできたこの偉大な世紀に大いに感銘をうける．そしてたとえば生物学における細胞理論や，物理学における場理論にも匹敵する偉大な発見と総合が，心理学的認識においてもさぞかし達成されたことであろうと考え，つぎのようにガイドに要請する．

「実験室のりっぱなことはよくわかったので，差

し支えなければ理論体系の方にご案内願いたい．地球心理学の理論がどんなものか拝見したい．」

ガイド役の地球心理学者はちょっと躊躇するが，「もちろん」という．

「もちろん，いろいろお見せしたいことがあります．実験家はみんなそれぞれの領域で仕事をしていますが，同時にみんなすぐれた理論家でもあります．それなりにたくさんの理論があります．事実，われわれの心理学には多くの学派があって，・・・・」

「たくさんの理論？」と火星からのゲストは意外といった調子で問い返す．

「科学が発展すれば理論はより安定的かつ普遍的となり，数からいえば，理論はむしろ少なくなるのではないか．」

と言って，たとえば力学のすべての事実がガリレオとニュートンのいくつかの法則だけで説明できるという例を指摘する．

ガイドは多少とも赤面して，心理学はまだ実験科学としては若年であり，ヴントの最初の実験室は1879年にできたばかりであること，心理学の対象は他の科学に比べて複雑で難しいことなどを説明する．あるいはさらに「もし心理学が心理学であることをやめて，生理学か物理学にでもなっていれば，もっとはやく一致点をみただろうが，それを敢えて拒否した．当然，心理学そのものの定義に時間がかかった．それが多くの学派がある一つの理由である」と説明した．

「学派がわかれていることはそれほど問題にならない．お互いにギブ・アンド・テイクでやっている．学派の存在は学問の未熟を意味していることは確かだが，それも今は昔のことになりつつある．」

と別のガイドは言った．

「それはどうだろうか」と主任格のガイドはこれを遮る．かれは案内の責任者としてもっとも慎重であったが，「もしそれが今は昔であるにしても，問題が解決されているわけではない．われわれが基本理論において進捗していないことは確かだ．」

「いやいや」とさきの心理学者は言う．

「はじめは理論の違いがあったけれども，今はそんなにばらばらではない．結構，共通理解が得られている．」

ここにおいていままで黙っていた一人のガイドが大きな声で言った．

「火星のゲスト諸氏はなぜ理論にそんなにこだわるのだろうか．なぜわれわれがそんなに弁明しなければならないのだろうか．それより科学の仕事は事実を追求することではないのか．われわれはまだ理論構成の段階にいたってはいない．検証もできない仮説的構成体に飽き飽きしている人もある．もっと実験し，データをとる必要がある．そして単純にカーブをかく．理論は要らない．理論の必要を疑問視する人もいる．」

ここで別のガイドが言う．

「私は反対だ．理論はその扱い方次第で非常に役にたつ．媒介変数をたてるにも，それを観察可能な用語で定義すれば，必ず有効な関数関係が得られる．すでにこの種の理論で有望なものがある．これならばわれわれのゲストもきっと納得するだろう．」

この内輪争いに主任ガイドは明らかに当惑するが，ここで地球心理学のもっと確かな基礎づけの必要なことを痛感して，次のように言うのである．

「理論に対して否定的な態度には反対だ．もちろん事実の蓄積は必要だ．しかし実験は知的な仮説に導かれてこそ実りがあるのであり，盲滅法ではだめである．理論構成は慎重でなければならないが，慎重の置きどころが問題だ．それは実験の方法と条件統制と結論の論理にある．

われわれは結論を出す前に，精巧にして発想的な理論をたてなくてはならない．観察事実だけから媒介概念を定義しても，その背景にモデルがなくては進歩がない．そういう理論は将来性がない．理論的なモデルがあってそれを実験的に検証できる理論というのは，間違っていてもそれなりの目的を果している．

どうせわれわれは万全ではないのであるから，自由な気持ちで仮説をたて，これを修正していけばよい．四球を選ぶよりは三振の方が気がきいている．無難な媒介変数ばかりをゲストに見せないで，三振場面も見せたらどうか．」

科学における「理論」のあり方

ガイドたちが喧々愕々となってはもう見学どころではない．そこでひとまず状況を整理してみよう．

「理論は重要だ」という場合の理論とはなんであろうか．それは少なくとも小さな個別的事実の説明ということではなくて，ある程度の現象全体，あるいは諸科学や自然全体を包括する意味で用いられている．つまり統合的概念体系である．それは経験法則の全体に論理的まとまりを与え，それから定理を演繹し，その予測性をテストして，理論の妥当性を評価するというものである．そのような概念体系は，それに過度に固執しなければ，研究を刺激する価値をもつことは確かである．うまくすればそこからさらに広い地平線が開ける．

よい理論は理解を深める．それによって全体的見通しが突然変わることもある．科学における偉大な

洞察や転換の契機は理論にある．多くの場合，新しい理論は重大な知的混乱あるいは理論的危機からおこるものである．

理論の背景には実験と観察があるけれども，理論そのものは純粋に「考えること」だけによる結果である．それによって疑問が統合され，それまで見えなかった自然の法則性が明らかになるのである．

この意味における理論が軽んじられ，その結果としての理論的暗黒が，それでもわれわれを脅かすことのないような科学は貧弱な科学といわねばならない．他方，人間的認識の危機から生まれた苦心の理論には，無視することのできないポテンシャルがある．

火星からのゲストは，いささか粗さがし気味であり，ガイドはあまりに防衛的過ぎたかもしれない．科学における理論の重要性を認めれば，現代心理学における間口の広さや華やかなプログラムは，その理論的側面から見る限り何の弁明を要するであろうか．少なくともそこにはある種の極めて適切な理論的理解が形成されつつあるという雰囲気はあると思われる．

実際，多くの心理学者において科学理論に対する関心は高い．経済的な真に普遍的な理論こそ科学にとって価値がある．そういうことは彼らも人並に考えている．しかしその熱意にもかかわらず，心理学研究におけるデータの蓄積も仮説検証も，いまだ十分にこの要求を満たしていないことは確かである．

たぶん火星ゲストも，地球心理学者たちが真に科学的理解の何たるかを認識していないとか，まして地球心理学者たちがそれに怠惰であったとは思うまい．地球心理学のあらゆるトピックスにたくさんの理論があり，それらが極めて拡散的であることに，彼らは混乱しただけなのである．

もちろんたくさんの理論があるというだけでは，理解が進んだことにはならない．それは誤りの積み重ねを証明しているようなものである．しかし多くの理論に一致をもとめるのは困難であり，実際，いかなる科学の領域でもおおむね理論には不一致がある．しかも有機体の複雑さを思えば，自然は心理学者の前に越えがたい障害でたちはだかっているかのごとくである．かくして統一的説明は永久に挫折するかのごとくである．

心理学理論の検討において，どこに矛盾があり，どこに不一致があるのか．それが一層明かになれば，それもまたよきサインである．そこから新しい洞察も生まれよう．理論は主唱者によってただ声高に叫ばれるのではなくて，いろいろな立場から批判的かつ好意的に見られなくてはならない．聴くべき理論には耳を傾けなくてはならない．折衷主義者も一党一派に偏する者も，みなこれに参画しなくてはならない．

知覚理論は古くからの問題で，長いこと哲学者や科学者を悩ませてきたことの一つである．心理学者の手によってこれが科学的研究の対象となり，実験的になったのも一番早かった．しかも知覚は現在なお関心の高い活発な分野である．その後，人格研究や臨床，社会その他の領域との関係も重要となっている．新しい視点が生まれ，新しい現象が発見されている．

学習はある意味では知覚とライバル関係にあるが，知覚と学習はともに行動研究の中心的位置にある．このことは実験家のみならず，知覚過程をより広く体系的に理解するためにも意義あることである．両者ともに，その理論の特徴と問題点を明らかにし，互いの違いとともに共通点も見出すことを考える．共通のものが明かになれば他の領域との関連も発見されよう．

この場合，問題の分析や理論の評価それ自体が，また一つの視点からなされるということは避けられない．しかし一定の視点からなされる批判の方が，単なる形式論的問題の指摘より刺激的であろう．要は読者の側において，批判者の理論的バイアスから事実と論理とを切り離してくれればよいのである．知覚のような面白い問題を，先入見なしで議論できる理論家のいるという方がおかしい．

理論構成の基本姿勢

理論ないし理論構成に対してとるべき姿勢として二つの可能性がある．

第一に，心理学はいまや成熟した段階にあり，理論形成は実験の多様化の結果として，多少とも部門化されてはいるものの，ある程度の安定した状態に達していると考える．完全な理論というのはないにしても，一定の体系的位置づけがかたまっており，それは近い将来大きく変わるとは思えない．それはかなり最終的なもので，その後の実験や標準的論文に有効に利用される．この場合，説明しようとした問題をその理論が説明するかどうかで，その理論を受け入れる．比較的せまい領域だけの一般化で満足する．そこでは小さな修正，点検，総合が主な課題である．これは穏当な仕事であり，厚かましい印象も与えない．

本論でとろうとしている第二の姿勢はこれとは違うものである．心理学はもちろんまだ未成熟である．おそらくいかなる科学といえども，これで確立したというものはない．真にオーソリテイティブとよぶ

にふさわしい理論はまだない．最も価値ある科学理論とは最も普遍的かつ説明力のあるものであるとすれば，そういう理論はそれが意図した以上の，当該問題領域以外の要請にも応じられなくてはならない．

このような批判的立場においては，理論の長所はそれをもって終りとせず将来への方向づけとする．現在の諸理論を単に妥協させるというのではなく，必要とあれば新しい理論の形で呈示しなくてはならない．それは過去の洞察に基づきながらも，その統合でも妥協でもない．このプログラムは過去における達成の重みづけであるとともに，現在の理論的要請の評価と強調である．

これは大胆な筋書きである．それは責任も重い．しかし心理学理論の現状の多様さと相違，かつまた相互和解の難しさを見ると，結局はこの方がよりよい結果をもたらすであろうと思われる．

理論評価の基準

このような理論的要請に関連して，心理学理論，とくにこの場合，知覚理論について，これをいかなる点から評価するべきか．科学方法論としてとりたてて格別なものではないが，つぎのような各項目があげられる．

1．事実との一致性

その理論を支持する事実があるか．その事実が真に理論を支持するか．理論は他の事実とも整合的か．すくなくも無矛盾か．

2．一般性

その理論は他の多くの事実や法則に適合するか．それは単に無矛盾というだけでなく，理論の中にその事実の適切な位置づけがなされることをも意味する．この一般性基準には二つのレベルがある．

a．その理論の関わる特定の現象範囲内の一般性．その範囲のいかに多くの現象をとりこむことができるか．これを理論の完全度という．

b．その現象範囲をこえて他の多くの種類の現象にも適用される一般性．これは科学全体の基本概念に関わるものである．これを理論の体系的可能性と呼ぶ．

われわれの課題は知覚論であるから，その意味では専ら前者のレベルの議論になる．

3．経済性

一つの理論体系の中で，いくらでも法則を増やしていけば説明できる事実はそれだけ多くなる．つまり一般性は高まる．しかし法則の数はなるべく少ないのがよい理論体系というものである．

4．実験可能性

理論は実験的検証ができるように十分に操作的でなくてはならない．そのためには概念は操作的に明析かつ非曖昧な指示体を有するものでなければならない．

5．理論的整合性

理論にはその中で互いに矛盾があってはならない．

6．説明的価値

理論は現象を理解させるものでなくてはならない．理解とは単にアナロジーではなくて説明のことである．ひとたびその法則がアクセプトされた以上は，その説明についてそれしかないと思わせるものでなくてはならない．その論理と説明は十分に明析かつ詳細で説得的でなければならない。

科学における説明と理解

科学の本質的課題は普遍的命題による現象の一般的記述と予測にある．説明とは，少なくともその科学がスタートしたときよりは，より一般的な用語で現象を記述することにある．

例えば物体の「落下」を「地球に向かって物体が動くこと」というのが初めの荒っぽい記述とすれば，落下現象の説明とは，たとえばニュートンの重力の法則のように，この現象がおこる一般的条件や，その量的ないし数学的関係を述べることにある．

何らかの法則による第二のステートメントは第一のステートメントより正確かつ一般的であるが，それでもまだ「記述」である．それはより普遍的な用語で与えられているというだけの違いである．

因果関係による説明もまた事象の一般的記述である．この場合の現象記述は「ある事象Bはある事象Aに先立ち，AはつねにBに続く」というような形式をとる．

普通，われわれは説明とは，「いかに」や「なぜか」を含む文句と考える．「いかに」や「なぜか」はやはり一般的記述を通して答えられるものである．例えば生物がいかにして食物を同化するかというときに，その答えは「浸透」によってということになる．さらに浸透とは何かといえば，膜を通して食物の粒子が移動することであり，溶剤と溶質の濃度に関係してその移動が量的に変化し，方向がきまるということである．

これらの文句はやはり記述であるのだが，より一般的な法則の水準にある．さらにこれらの効果がどうして招来するのかといえば，細胞膜や圧力などの，もっと普遍的な記述の方向に進む．

なぜ動物が迷路を走るかというとき，動物を動かす動機ないし動因によるという．さらにその動因に

ついてはエネルギーやその分布などについて語ることになる．結局それはその事象の記述である．決定的な，より一般的な記述をいうのに，便宜上説明という言葉を使っているだけのことである．

広い意味では説明は記述であるにしても，一般と具体との関係がつかなければ，つまり一般的原理が特異的事実に適用されることを示さなければ，その現象が説明されたとはいえない．浸透の法則によって生物における食物同化を説明するためには，生物に浸透が行われる細胞や細胞膜がなければならない．

一般的なエネルギー概念によって動因を説明するには，生物が刺激エネルギーの受容器をもつことに言及しなければならない．さらに神経や筋繊維におけるエネルギー変化や，エネルギー分配体としての腺やホルモンも問題としなければならない．

このような水準の記述はもちろん一般的記述であるが，それはいまや純粋に量的な法則を与えるという意味では特殊な記述である．このような側面を，その法則や過程がおこなわれる「メカニズム」という．この用語は事象それ自体から遊離した法則を表すかのようで，望ましくないかもしれない．しかしこの側面がどう呼ばれようと，理論が説明となるためには，それについての合理的な情報的な言明でなくてはならない．これは理論にとって厳しい，しかし不可欠な必要条件である．

いま述べたことから「理解」という用語の使い方がきまってくる．言うまでもなく「理解」は適切な説明から得られる．ある現象を理解するというのは，第一にその現象について一般法則による記述が得られるということ，第二にその一般的記述が当該の現象に特徴的な特異的な条件において矛盾しないということである．この理解と説明の意味，あるいは「いかに」と「なぜ」の意味は，さきに述べた第六の基準からも言えることである．

この「理解」の意味は，実験可能性，説明的価値，一般性などの基準とも無関係ではない．それにもかかわらず各基準はやはり異なるものであり，多くの場合，別々に検証されるものである．現象説明における理論の一般性と完全性のテストのためには，その現象の種類，つまり知覚なら知覚のどういう現象が問題であるのかを明確に定義することが必要である．理論がなにを説明しようとしているのかを明らかにするためには，現象のいろいろな側面を具体的に示すことが必要である．

さて知覚諸理論の批判的検討という行為は，各理論の単なる品定めや揚げ足とりではないことに留意したい．それは心理学が知覚論においていまどのような発展段階にあるのか，どういう過程にあるのかを確認することにある．現在の問題点を明らかにし，なにが必要とされているのかを評価することにある．この視点によって理論評価の規準も変わってくる．

作業仮説としての理論

理論の構成や選別は，その妥当性を実験的証拠に依存しているが，実験に劣らず，理論の構成や選別それ自体がまた科学としての作業過程である．

普通の教科書は経験的に確かな事実だけを記述し，理論はどとらかといえば補足的である．理論それ自体にアプローチするには，そういう教科書的な方法とは別の方法がとられなければならない．そこではもともと明確な答えは期待しない．

多くの前提，事実，論理的推理がある．しかしたとえばそれが米粒であるのか籾がらであるのか，それを見極める必要がある．籾がらを重大に受け取ってはならないし，米粒を見落としてはならない．持続的でかつ忍耐強く，同時に覚醒的であり創造的でなければならない．いくらかでも理解が深まり，いくらかでも一般性が高まれば，多少の疑問には眼をつむる．

ある理論がすっきりした，しかし限定的な形になることもあり，あるいは荒っぽい形ではあるが，新しい事実の発見につながることもある．理論は来たり，而して去る．しかし仕事は終ることはない．

科学の仕事は事実的な教科書的研究ではない．理論が必ずしも最終的な答えを与えるものではないからといって，これを重要にうけ取らないでよいという理由はない．ましてや単なる読物ではない．科学とはもっと真剣な仕事である．実験は理論に基づいて行われる．理論があってこそ，実験的発見がさらに知識としての実りとなる．理論はその論理的基礎である．

科学的研究は回り道を通ることもあり，後退もしなければならない．議論を支持する意見や例証は，むしろ支持的であるがゆえに一層多角的に検討されねばならない．しかしそう簡単には結論にいたらないであろう．多くの場合，結論はない．われわれはみんな手探りをしているのである．

賛成意見も反対意見も，理論の立脚点を見出し，真実に至ることには必要なことである．それは問題の新しい見通しを開くかもしれない．当該の問題と無関係の思考領域に，時として遊ぶこともあるかもしれない．それもまた新たな興味と閃きのもとになる．

知覚現象の諸側面

「物はなぜそのようにみえるのか」について，各種知覚理論を論じるまえに，一体，「物はどう見えるか」について考えなくてはならない．知覚研究は，まずその現象的現れと刺激の客観的な物理的記述との関係について論じるということが多分もっとも普通の課題であるが，物の見え方にもいろいろの側面があり，見方がある．いまこの見え方の諸側面を総括し，これを知覚一般の特性として考察するとともに，知覚する有機体自身の問題にも関連するものとして，これを見ようとする．

われわれの知覚のあらゆる変化の中に，現象の本質とそれにかかわる生理的過程の本質が含まれるいくつかのカテゴリーがある．それは異なるカテゴリーではあるが，全体的統合的内容と活動の各部分として，互いに関連するカテゴリーである．そのような分類は多少は大胆にやらなければならないし，人によって違う分類にもなるだろうが，知覚理論の説明すべき諸現象のリスト・アップは理論検討の出発点として必要である．とくに理論の一般性や完全性を問題とするときにはそうである．

ここに述べようとする知覚の現象のカテゴリーは現象的性格のものである．これらは物が知覚者に現れる特徴的な仕方についての記述である．これはある程度，伝統的な知覚実験や知覚理論がやってきたやり方の結果である．いずれも研究者の関心をとらえてきたものであり，またその説明には大いに努力をかきたてられてきた．それなくしては知覚の実験的研究は不毛であった．

しかし知覚はまた有機体の活動であることも忘れてはならない．それは受容器，神経インパルス，皮質活動パターン，運動系をふくむ．欲求，動機，情緒などの身体状況の影響も言うまでもない．このあるものは現象的カテゴリーのなかでも述べられる．

これらの生理的側面が知覚の現象的側面のようにはいつもは論じられないのは，それ自体がまだよくわからないとか，その役割がはっきりしないというだけの理由である．知覚過程の説明の究極的にもとづくのは，それについてのその後の生理学的な知識である．極めて現実的にいえば，その生理的側面もまた知覚現象に属しているとみなければならない．

生理学的アグリゲートの問題と，それが有機体においてどのように環境の対象物との類似性に構造化され，生物の全体行動の統合を可能にしているかという問題は，知覚過程のまさに中心問題である．「なぜ物はそのように見えるのか」の現象的問題も究極的にはこれに帰することであろう．

知覚現象の六つの分類

以上に述べたところの趣旨にしたがって，知覚現象をつぎにのべるような六つに分類しようと思う．この分類とその具体例はきわめて基本的なもので，お互いよく判っていることである．知覚の当面する理論的課題を議論しようというには，自明のことをとりあげたほうがよい．ここでは円盤ディスクのような簡単な対象を，いろいろ異なる条件で見ることを考える．例は専ら視覚であるが，他の感覚領域でも同じことである．

1．感覚の質と量的次元

白紙の上にいくつか小さい紙の円盤があるとする．その色は赤であり，青である．経験される感覚の質，視覚においてはこのような色あるいは色相は，物の見え方の明らかに一つの側面である．

感覚の質は一定の量やディメンジョンを伴っている．少なくも視覚の場合，質は延長性を有し，空間を占めている（著者註：オルポートはディメンジョンという用語を第一次的にはいわゆる物理的次元およびその次元上の連続量の意味で使用している）．

感覚の質に関連して強さの体験がある．一つの灰色のディスクは他のディスクより明るい，あるいは暗い．一つの赤いディスクは他のディスクよりもっと赤い．一つの音は他の音より大きい，あるいは柔らかい．

質的体験は時間的に継続する．感覚の質とディメンジョンはかくして物が現れる一つの一般的仕方となっている．これらの質とディメンジョンはそれが観察される条件や周辺によって，たとえば背景や照明によって変わる．それはいろいろな仕方で相互作用するが，質の存在はこれらの相互作用によって完全に説明されるものではない．すなわち全体としてのわれわれの知覚は簡単な質やディメンジョンよりもずっと複雑であるが，簡単な質やディメンジョンはそれでも存在する．

ティチェナーは意識の純粋な徹底した内省分析によって，感覚を意識の要素とみなし，さらに感覚の属性とディメンジョンとして，質，強度，延長，持続，明瞭度などをあげた．しかしそのような抽象的な感覚を意識の構成要素とすることは，いわゆるモザイク説としてゲシタルト心理学がつよく反対したことである．その意味でこの分類カテゴリーと用語法には若干の難しさがある．

ここではおそらく感覚と言わずに，質の体験それ自体を世界の意識の基本的事実としてみるのがよいであろう．それはエネルギー，すなわち有機体自体のプロセスによって刺激から得られるところのエネルギー，に与えられる事実である．質は見たように

あるユニークな何かである．それは実験的にはディメンジョンと違うが，それとつねに関連がある．すなわちそれは延長，強度，持続などのディメンジョンに「入いって」くる．はやい話が，延長，強度，持続のディメンジョンがゼロにでもなれば，質も消失することは確かである．質がこれらのディメンジョンに完全に還元されることはないにしても，このことは意味がある。いかなる対象についても，物理的体験世界においても，同じことが言えるであろう．

しかし質それ自体のディメンジョンはないであろうか．質は一つの連続体にそって分布していると心理学者は考える．たとえば色の一般的様相としての色相は，色立体のベースに沿った連続系列として並んでいる．音楽の階調のような段階的な音は一定の小さなステップのシリーズである．

この考えは初期の内省心理学者をして質を抽象的概念として感覚の属性ないしディメンジョンと呼ばせた．しかしここには一つの混乱があるように思われる．たとえば原色感覚は連続体をなしてはいない．それぞれがユニークであり，色立体の各コーナーに示されるように，互いに距離が離れている．

原色と原色の間に中間的な質の連続体がある．それは原色成分に連続量的に類似し，そして原色としての質にシャープに終る．質のいろいろ異なる強度の融合の連続的な中間系列がある．

この融合は普通，分析のできないユニークな全体と知覚される．しかしその原色成分に別々に注意することはできる．同時に意識的に同じ明瞭度で知覚できるわけではないが，全体性と成分がある．このような要素的な原色的な質を，特定の理論や内省法へのコミットメントの故に無視したりするのは，日常生活の事実に眼を閉ざすことになる．

2．知覚の体制，形態質の移調

第二のカテゴリーは第一と対照的である．前のと同様にそれは環境の事物の体験であるが，刺激によってよりは有機体の内的過程によって決定される．それは知覚的マニフォールドにおいてつよく相互作用を表わし，視覚で言えばいわゆる錯視効果ともなる．それは形，輪郭，グルーピングなど，対象の形式的性質にかかわるものである．

円が平行線の間や角の中にあるとき，その見えの大きさは変化する．歪んだ曲線や背景条件によって円は螺旋状に変形もする．正方形は平行水平に置けば正方形であるが，その角を下にして立てるとダイヤモンド型に見える．

白紙に画かれた一つの円はその内部の領域を周りから分離し，円の線はその輪郭となり，円の縁として円に属しているようにみえる．背景に属する円形の穴の縁とは見えない．円は一つの図となって前方にあり，白紙の残りの部分は，あまり活力のない背景となって広がっている．

知覚には常に図と地がある．どの感覚様相でもそうであるが，われわれの世界には図があり，それに対して地がある．なにが図になり，なにが地になるかを決定するいくつかのルールがある．二つの部分が互いに図にも地にもなるような場合は，図と地が交代する．

点々の分布においては，各点がグルーピングしたり，分離したりする．二つの図は，その配列の仕方によって一つの図にまとまることもあり，まとまらないこともある．

それだけを見れば簡単な明確な図が，より大きな緊密な図の中に埋もれて判らなくなることがある．部分部分がつながってひとつの全体を作ってしまう．あるいは全体の文脈の中にあるとき，図形は単独であるときと違って見える．

聴覚体験でも同様に体制的なまとまりの効果がある．規則的なタップ系列を聴く時，同じ強さであるのに主観的な強弱のリズムがある．二つの光点が互いに近く，ある時間間隔で呈示されると，一つの点の連続的運動にみえる．ドットが円形に並んでいる場合，ドット群というよりは一つの円としての知覚の方が優勢である．

知覚の統一的全体の中の部分の関係は，各部分を超越したひとつの存在であり，部分が変わっても，適切な比例関係において，その全体的関係は依然として認められる．この事実は旋律が一つの調子から他の調子に移るときにも示される（形態質）．

二つの灰色の紙の暗い方に反応するように報酬訓練されたヒヨコは，暗い方がもっと暗い灰色とくみ合わされると，ヒヨコは前者に訓練されたにもかかわらず，後者の方に反応する（移調）．

知覚は一つの部分が他の部分に影響しながら，一つの全体の中の関係によって進行する．それ自体では何もおこらない．「全体性」は部分が別々にあるときには体験出来ないアンサンブルによって形成される．

それはある意味で抽象的である．それを体験するためには事物の体験における，より明白な多くの内容を無視しなければならない．それらは知覚の内容というよりは知覚体験の形式にかかわるものである．このカテゴリーの現象は知覚の図形的側面とか体制的側面といわれる．

3．知覚の恒常性

円形のディスクがあって，一つは観察者の前額平

行面にあり，もちろん円形にみえる．もう一つは傾いて，その網膜像は楕円のはずであるが，それでも楕円ではなくて，円のようにみえる．ただし完全に円形ではなくて，楕円よりは円形に見えるというような妥協がある．ここに形の知覚の恒常現象がある．

形の知覚の恒常性によって，物が異なる角度や立位にあるときも，それが同じに見え，それを認知し，それと判る．恒常は異なる距離における大きさの知覚，異なる照明における明るさの知覚にもいえる．

対象と周辺のいろいろな手がかりが，知覚恒常に緊密に入ってくる．これらの手がかりが過去の経験と一致するように利用される．その結果として，多くの場合，対象知覚はその客観的特性と矛盾しない．つまりかなりベリディカルである．

4．知覚ディメンジョンの主観的尺度

第四のカテゴリーは刺激系列の中の一つの刺激の感覚量の絶対判断の場合に起ってくるものである．これは第一のカテゴリーにおいて，たとえば明るさや大きさが，何か客観的基準との関係で評定される場合の感覚的ディメンジョンと混同されてはならない．ここでいうのは刺激についてわれわれが明るいまたは暗い，重いまたは軽いなどということの問題である．

たとえば光のスポットの円形ディスクをスクリーンに投射呈示したとする．大きさは同じで明るさがある範囲でいろいろ変わる．われわれはそれが明るいか，暗いか，中くらいか，それぞれのディスクについて判定する．標準は与えられないが，刺激系列が一通り呈示されると，中くらいと判定される明るさの程度がきまり，それより上は明るい，下は暗いと判定される．言い替えれば，その判定の主観的尺度を形成する．これを知覚ディメンジョンの基準枠という．

5．知覚対象の意味

この知覚カテゴリーの普遍性はあまりに自明なことである．これはこれまでのカテゴリーといささか異なるものである．この問題について必ずしもその必要があるわけではないが，閾下の条件で話を始めよう．

ある対象を非常に暗い照明とか非常に短時間呈示で認知実験を行うとする．呈示時間を徐々に長く，あるいは照明を徐々に明るくする．はじめは何か丸くて赤いが，何だかわからない．さらに照明または呈示時間を増加する．何度か誤認するが，やがて突然それがわかる．それはリンゴだ．赤いディスクでもないし，赤いボールでもない．それはもう間違いはない．

それはもはや単に色の体験ではない．しかもそれは体制的全体的特性によっても適切に性格づけられない．そこにはテクスチュア，部分間の体制，輪郭の連続性があり，地に対する図があるが，それはこれらのもの以上である．それは大きさや色の恒常の法則にしたがう．それはリンゴとして大きいか小さいか，基準枠もある．しかし明らかにこれだけではそれを記述出来ない．

知覚のこの側面はあまりに当り前のことで，事物の見えについて，これより意味のある何ものもあろうとは思えない．すなわち事物や事象は単に質やディメンジョンや形ではない．「事物」であり，「事象」である．このような具体的な物的性質concrete object characterはすべて知覚の基本的性質である．

たぶんこの現象のもっとも特徴的なのは，それが「意味」を有することである．知覚対象の意味はその対象の単なる体制や全体ではない．どんな大きさか，明るさかでもない．「それは一体なにものであるのか」の体験である．対象のなかには事象も広義に含むので，ここでは活動や状況の具体的な性格意味もふくむものと考える．

6．知覚における構え

はじめの三つのカテゴリーは，感覚の質とディメンジョン，体制，恒常性であったが，これはつねに誰にでも共通した知覚の側面である．第四と第五のカテゴリーでは共通体験の背景を有する人にとっては，つねに同じ特性である．しかしここに述べる第六のカテゴリーは個人差が，また同じ人でも時が違えば違うような，それが重要な役割をもつ知覚の側面である．

個人の特定の構えや態度は，持続的にせよ一時的にせよ，知覚される対象の選択に影響し，その知覚しやすさに影響する．現象的には対象の誘目的な明瞭度や活動性にも結果する．知覚のこの側面には刺激の具体的物的性格がとくに関係がある．対象の性格や意味を考えると，そこに個人との関係を見ることができる．

このことは捜し物をするときとか，不明瞭な刺激状況における意味の探索において明らかである．たとえば意味もないただの円形や色のディスクと違って，なくしたのが高価なブローチで，なんとしてでも捜し出そうという必要度や構え，それがブローチの記憶イメージと重なって，探索を促進し，時間をはやめる．

このように要求のもたらす知覚的構えや準備は日常のことである．情緒的状態もまた知覚的構えとなり，対象をどのようにみるか，を決定する．暗い夜，墓場のなかで墓石がおばけに見える．不確定な曖昧な事物がどのように見えるかは知覚者の個人的性格

にもよる．すなわちパーソナリティ診断のロールシャッハ・テストに見られるとおりである．

しかし「知覚的構え」は強い動因的，情緒的，人格的条件ばかりでなくて，観察者の体験における事物の出現頻度とか親密度のような，そんなにドラマチックでない要因にも依存することを見過ごしてはならない．

以上をもって知覚の六つの現象的カテゴリーとする．かくしてすべてここに述べた効果は，環境において何を知覚し，何を無視するかを決定する選択の問題である．

これらのカテゴリー分類は高度に凝縮し，議論はあえて生理学を避けているが，差し当りの目的には十分であろう．かくしてすべて知覚理論たるべきものの考察すべき課題は，少なくもこの六つのカテゴリーにある．すなわち感覚の質とディメンジョン，体制，恒常，基準枠，具体的物性，構え効果である．

あとがき

「オルポートの知覚諸学説批判」の総説にあたって，その基本的方法論となるべき本稿の内容は当然冒頭に論じるべきであり，実際，オルポートにおいてそうである．しかしこのシリーズは，当初，オルポート知覚論のそれほどの完全紹介を目指したものでなかったので，この部分はむしろ意図的に割愛した．しかるに本シリーズが結果としてオルポート知覚論のほぼ全貌を紹介しつくしてきた段階で，オルポートがこれまでいかなる視点に基づいて知覚諸学説批判を展開してきたかを明らかにすることが，本シリーズを終結するためにやはり必要になってきた（文献参照）．

オルポートの知覚諸学説批判は，この批判パラダイムによってなされてきたはずのものであるが，さてあらためてこれを成文化してみると，このパラダイムとすでになされた各学説批判の実際とがどこまで整合的であるかが問題となる．それがどこまで達成されているか，検討を要することであるが，本シリーズにみられる限りにおいて，その達成度如何の責任が紹介者としての筆者にあることはもちろんである（未完）．

引　用　文　献

Allport. F. H. 1955 *Theories of perception and the concept of structure*. New York : Wiley.

金子隆芳　1970　Allportの知覚諸学説批判とその構造学説　東京教育大学教育学部紀要，**16**，63—69.

金子隆芳　1972　知覚論における形態主義—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説（続）東京教育大学教育学部紀要，**18**，91—98.

金子隆芳　1974　知覚論における要素連合主義—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説（続）東京教育大学教育学部紀要，**20**，61—66.

金子隆芳　1976　知覚論における機能主義—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説（続）東京教育大学紀要，**22**，101—108.

金子隆芳　1979　知覚における運動的要素—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(5)　筑波大学心理学研究，**1**，3—10.

金子隆芳　1980　知覚における意味の問題—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(6)　筑波大学心理学研究，**2**，1—11.

金子隆芳　1983　知覚の指向状態説—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(7)　筑波大学心理学研究，**5**，1—10.

金子隆芳　1984　知覚の仮説理論—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(8)　筑波大学心理学研究，**6**，1—8.

金子隆芳　1985　知覚のセット・ダイナミクス—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(9)　筑波大学心理学研究，**7**，1—6.

金子隆芳　1986　知覚と行動主義学習理論—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(10)　筑波大学心理学研究，**8**，1—7.

金子隆芳　1987　知覚論における動因作用説の周辺—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(11)　筑波大学心理学研究，**9**，1—7.

金子隆芳　1988　知覚におけるシステム論—Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(12)　筑波大学心理学研究，**10**，1—15.

—1988. 9 .30 受稿—